自分を傷つけた相手に対する多様な対人動機測定に関する試み

Exploratory Study to Measure Broader Interpersonal Motivations in Relation with Transgression

小　浜　　駿・沼　田　真　美
Shun KOHAMA・Mami NUMATA

論文概要

本研究では，状態ゆるしの測定指標であるTRIMを基に，自分を傷つけた相手に対する対人動機をより広い範囲で検討した。研究1では，TRIMに回答した大学生388名がクラスタ分析によって３つの小集団に分けられた。もっともゆるせなさが強い小集団においても加害者に報復しようとする意図は見られないこと，加害者への報復はより婉曲的な願望として生じやすいことが示唆された。研究２では，より深く傷ついた回答者を選別し，加害者への対人動機に関する測定項目を増やして検討を行った。18歳から29歳の男女352名を対象に分析を行った結果，感情のしこりや，ゆるそうとする気持ちとゆるしたくない気持ちとの葛藤が新たな対人動機として抽出された。クラスタ分析によって回答者は４つの小集団に分類され，もっともゆるせなさが強い小集団において，加害者への報復意図が十分高いことが示された。また，葛藤は，特定の小集団において特異的に高いことが示された。２つの実証的検討から，加害によって傷ついた程度と対人動機との関係性や，感情のしこりおよび葛藤といった新たな対人動機を測定する意義について議論された。

キーワード：状態ゆるし，ゆるせなさ，TRIM（Transgression Related Interpersonal Motivations），葛藤，不協和

1　問題と目的

ゆるしは，自分を不当に傷つけた人に対する，否定的な感情，判断，行動が消失することおよび肯定的な感情，判断，行動が生じることなどと定義され，内的反応の変容として概念化されている（沼田, 2019a）。

ゆるしは，内的変容の中でも，特に報復意図および怒りの感情を手放そうとすることで進行するプロセスと考えられている（Wilkowski, Robinson, & Troop-Gordon, 2010）。Wohl & McGrath（2007）は，先行研究の定義をまとめながら，加害者に対する回避あるいは報復に対する動機づけが減少することでゆるしが達成され，加害者に対する向社会的行動や関係の再構築につながると論じている。このように，ゆるしは1）否定的感情あるいは報復反応および回避反応（以上を総じて，否定的反応と記述する）の発生，2）そ

れらの低減，3）肯定的感情あるいは接近反応（以上を総じて，肯定的反応と記述する）の増加という３段階から構成されるプロセスと考えられている。

ゆるしの進行プロセスの当初は自分が不当に傷つけられた状態であり，精神的に不適応な状態である。自分が傷つけられた状態を解消するゆるしは，単に対人関係の復元を促進するメリットがあるだけでなく，個人内の精神的適応を促進するメリットも存在する。ゆるしはwell-beingを良好に保つために重要であり（Worthington, Witvliet, Pietrini, & Miller, 2007），怒りや報復意図を低減するための介入モデルに関する研究も多く行われている（e.g. Baskin & Enright, 2004; Worthington & Wade, 1999）。このように，ゆるせなさを低減し，ゆるしを促進させることには重要な意義がある。

実証面では，個人の有する全般的なゆるしやすさについて検討する特性ゆるしと，調査時点での感情や判断について検討する状態ゆるしの２つが中心的なアプローチとなっている。ゆるしが内的変容プロセスとして概念化されていることから，本研究では，より変容しやすい現象を検討可能な枠組みである状態ゆるしについて取り扱う[1]。

状態ゆるしを測定する尺度として，EFI（Enright Forgiveness Inventory; Enright, 2004），TRIM（Transgression Related Interpersonal Motivations; McCullough, Root, & Cohen, 2006），RFS（Rye forgiveness scale; Rye, Loiacono, Folck, Olszewski, Heim, & Madia, 2001），Worthington et al.（2007）による検討がある。

EFI は，３側面における否定的反応と肯定的反応をそれぞれ測定する自己報告式尺度である。３側面とは，感情（私は相手に対して頭にきている／私は相手に対して温かみを感じる; 項目例。以下も同様），行動（私は相手に話しかけない／私は相手へ友情を示す），認知（私は相手を悪い人だと思う／私は相手を好ましいと思う）である。

TRIM は，加害者への行動意図をもってゆるし（ゆるせなさ）を測定する自己報告式尺度である。TRIM は，報復（相手にそれなりの報いを受けさせたい）と回避（相手を避けている）と慈愛（相手の行動は私を傷つけたが，相手に対して好意を持っている）の3下位尺度から構成される。

RFS は，自分に対して不当な扱いをした相手に対するゆるしを測定する尺度である。RFS には，否定性の不在（私を不適切に扱った相手への怒りを手放せるようになった），肯定性の存在（私を不適切に扱った相手への思いやりを持つ）の２下位尺度から構成される。

Worthington et al.（2007）は，ゆるすための決断を測定するDFS（The decisional forgiveness scale）と，感情反応を測定するEFS（emotional forgiveness scale）を作成した。それぞれの尺度において，否定性の不在と肯定性の存在について測定されている。

測定尺度を概観すると，ゆるしプロセスを検討する実証枠組みは，概して否定的反応と肯定的反応が測定されている。否定的反応の低さを検討すれば，概念的要件と同様に，1）否定的反応の発生，2）その低減，3）肯定的反応の発生の3段階が検討可能である。

以上のように，ゆるしプロセスは否定的か肯定的かという価（valence）をもとに段階が区切られてきた（Thompson, Snyder, Hoffman, Michael, Rasmussen, Billings, ... & Roberts, 2005; Worthington & Wade，1999）。

中でもTRIMは，ある一点において優れた尺度であると考えられる。それは，２種類の否定的反応を測定できることである。EFIやDFSおよびEFSは，認知や感情といった様々な側面を検討可能という利点があるが，否定か肯定かという価に基づいた測定しかできない。それに対して，TRIMは，行動意図という１側面しか測定できない一方で，報復および回避という２種類の否定的反応（意図）を測定可能である。

ひとつの価に対して複数種類の反応を検討すべき理由は，感情強度（emotion intensity）の観点から，同じ価の感情を強度によって区別する必要性が示唆されているためである。感情強度の個人差について検討した一連の研究（Larsen & Diener, 1987; Rubin, Hoyle, & Leary, 2012）では，身が震えるほどの強い緊張や不安と，状況に反応して生じる罪悪感や恥が，異なる因子として抽出されている。また，Dixon-Gordon, Aldao, & De Los Reyes（2015）は，複数の実証的検討をまとめ，悲しみのような強度の弱い感情は内省的で適応的な反応を増加させ，脅威のような強度の強い感情は回避的で不適応的な反応を増加させると述べている。

検討文脈が異なることから，TRIMにおける報復の感情強度が強く，回避の感情強度が弱いと即断することはできない。しかし，同じ価でも異なる感情としてのまとまりが存在し（Larsen & Diener, 1987; Rubin, et al., 2012），それらの感情に伴って異なる反応が予想される（Dixon-Gordon, et al., 2015）という考え方は，ゆるしプロセスとの整合性が高い。すなわち，ゆるしプロセスでは，怒りのような感情と，そうした感情に伴って報復や回避といった行動が発生することを仮定し，これらの反応をもとにゆるしの段階を区切っている。したがって，反応強度によって同じ価の感情を区別する視点は，ゆるしプロセスに援用するうえで有用な視点であると考えられる。

以上のように，特定の価，特にネガティブな価である否定的反応において，複数の反応を測定することの有用性を示唆する知見が存在する。したがって，TRIMはゆるしプロセスをより詳細に検討できる指標であると言えよう。ただし，ゆるしプロセスを実証的に検討する指標として，TRIMには２点において改善すべき点があると考えられる。

第一に，理論モデルに比べて否定的反応も肯定的反応も種類が少ないことである。TRIMでも複数種類が測定されている否定的反応に絞って議論すると，否定的反応は報復と回避の２種類である。しかし，理論モデルでは，２種より多くの否定的反応が仮定されることが多い。

例えば，Worthington & Wade（1999）では，現象を表すノードを矢印型のネットワークで繋いだ，ゆるしの進行モデルが提言されている。モデルは14ノードと23のネットワークによって構成されており，価で２段階に区切る尺度研究よりもはるかに多い。このネッ

トワーク内には報復や回避が組み込まれているが，それ以外の否定的反応として反すうや消極的反応も含まれている。消極的反応はさらに複数の要素が含まれることが言及されており，その中には，ゆるせなさとゆるしとの葛藤といった曖昧な状態についても言及されている。

また，Baskin & Enright（2004）は，過去の文献をまとめることで，ゆるしを20の要素から構成される４段階のプロセスとしてモデル化している。４段階は，それぞれ暴露段階（uncovering phase），決定段階（decision phase），実行段階（work phase），結果段階（outcome phase）である。暴露段階では，怒り（第２要素）や恥（第３要素），傷つき（第6，第7要素）が生じると仮定されている。このモデルが正しければ，否定的感情が3種類存在し，それぞれ異なる現象として区別されていると考えられる。

Worthington & Wade（1999）やBaskin & Enright（2004）のモデルは，理論および事例報告を基に構築されており，実証的な制約がない。したがって，これらのモデルで提唱された否定的反応をTRIMで測定されていないことが，即座にTRIMの欠点であるとは判断されない。ただし，こうした理論モデルを参考に，より多くの否定的反応を新たに測定することも可能であろう。

第二に，報復が実質的に測定の意味をなしていない危険性があることである。Table1に先行研究におけるTRIMの尺度得点平均値をまとめた。McCullough, Fincham, & Tsang（2003）は大学生を対象に２つの縦断測定を行い，研究１では１週間間隔で，研究２では２週間間隔で，TRIMをそれぞれ５回測定した。その結果，報復得点は全時点で2.00を下回り，低いときには1.55であった。研究２では，過去７日間に深刻な被害を受けた者を分析対象としており，初回測定時点では報復が低減していない可能性が高い。それにもかかわらず，報復得点が低い得点を示した。Bono, McCullough, & Root（2008）も大学生を対象に２つの縦断測定を行い，研究１では計８週間で５回，研究２では３週間毎日で21回，それぞれTRIMを測定した。どちらの研究でも過去7日間に深刻な被害を受けた者を分析対象としていた。その結果，McCullough, et al.（2003）と同様に報復得点が非常に低い値を示し，最高値は2.28であった。このように，複数の実証データにおいて，報復意図が低減していないと考えられる被害直後においても報復意図が生じていないことが示唆されている。したがって，TRIMにおける報復は，加害者への対人動機の測定指標として機能していない危険性がある。

項目平均値に関しても同様で（Table2），研究によって違いがあるものの，報復は2.00-2.50の範囲で留まる項目が多かった。特に「仕返しをするつもりだ」（３つの先行研究でM=2.03-2.31）と「相手が傷つき、みじめな姿がみたい」（M=1.95-2.32）という項目の得点が低く，直接的な報復意図はほぼ生じていなかった。相対的に高い得点を示した項目は，「相手がしたことの報いを受けて欲しい」（M=2.67-2.99）であり，被害者から加害者への報復意図というよりは，どこかで加害者が罰を受けることを望む気持ちであった。

なお，回避および慈愛は，研究や測定時点，算出される平均値の種類によって異なるものの，多くで3.00以上の得点を示した（Table1およびTable2）。

Table1
TRIMの尺度得点平均に関する既存の報告

出典		尺度得点平均値 報復	回避	慈愛	サンプル概要	調査手続き概要
McCullough, Fincham, & Tsang(2003)	*Min*	1.59	2.43	3.23	大学生	5回縦断調査
Study1	*Max*	1.83	2.70	3.33	過去数週間における被害	1週間ごと(計4週間)
McCullough, Fincham, & Tsang(2003)	*Min*	1.55	2.32	3.59	大学生	5回縦断調査
Study2	*Max*	1.84	2.57	3.77	過去7日間における深刻な被害	2週間ごと(計8週間)
Bono, McCullough, & Root(2008)	*Min*	1.48	2.70	3.05	大学生	5回縦断調査
Study1	*Max*	1.83	3.11	3.39	過去7日間における深刻な被害	2週間ごと(計8週間)
Bono, McCullough, & Root(2008)	*Min*	1.75	2.64	2.48	大学生	21回縦断調査
Study2	*Max*	2.28	3.52	3.16	過去7日間における深刻な被害	毎日(計3週間)

note）縦断調査によって1つの実証的検討に複数の平均値が報告されたため,Min（最低値）とMax（最高値）のみ記載した

Table2
TRIM各項目の平均値

No	因子	項目	先行研究 (1)	(2)	(3)	研究1 全回答	ゆるし群	途上群	ゆるせなさ群
1	回避	相手とできるだけ距離をおくようにしている	3.29	2.85	3.31	3.47	2.43	3.62	4.19
2	回避	相手がまるで存在せず、周りにいないかのように過ごしている	2.84	2.76	3.10	2.71	1.76	2.97	3.27
3	回避	相手を信用していない	3.34	3.13	3.40	3.36	2.58	3.50	3.88
4	回避	相手に優しくするのは難しいことに気づいた	3.46	2.65	3.06	3.10	2.47	3.06	3.61
5	回避	相手を避けている	3.34	2.80	3.20	3.36	2.43	3.48	4.02
6	回避	私は、相手との関係を絶った	2.99	2.54	2.82	2.62	1.57	2.74	3.34
7	回避	相手とは関わらない	3.34	3.05	3.22	3.11	2.18	3.21	3.77
8	報復	相手に償わせるつもりだ	2.51	2.41	2.78	1.97	1.50	1.95	2.38
9	報復	相手に何か悪いことが起きればよいと思う	2.74	2.00	2.22	2.66	1.78	2.69	3.35
10	報復	相手がしたことの報いを受けて欲しい	2.99	2.67	2.91	2.63	1.99	2.60	3.19
11	報復	仕返しをするつもりだ	2.03	2.09	2.31	1.73	1.32	1.79	2.03
12	報復	相手が傷つき、みじめな姿がみたい	2.32	1.95	2.11	2.28	1.58	2.29	2.86
13	慈愛	相手の行動は私を傷つけたが、相手に対して好意を持っている		2.24	2.42	2.25	2.96	2.03	1.89
14	慈愛	気持ちを鎮めて、相手と前向きに関わっていきたい		2.40	2.56	2.91	3.83	2.68	2.41
15	慈愛	相手がしたことに関わらず、もう一度よい関係になりたい		2.52	2.63	2.63	3.35	2.38	2.24
16	慈愛	相手は私を傷つけたが、それはさておき、関係を回復できる		2.19	2.35	2.77	3.61	2.58	2.28
17	慈愛	私は、傷つきや憤りを水に流した		2.33	2.50	2.90	3.37	2.84	2.58
18	慈愛	怒りを手放したので、相手と健全な関係を取り戻すことができる		2.20	2.42	2.65	3.38	2.57	2.15

1）髙田・小杉（2016）
2）Barcaccia,Ioverno,Salvati, Medvedev,Pallini, & Vecchio（2021）Study1
3）Barcaccia,Ioverno,Salvati, Medvedev,Pallini, & Vecchio（2021）Study2

以上のように，回避は十分に高い評定がされているものの，報復は評定値が非常に低く，被害体験後に生じていない現象であることが示唆されている。したがって，報復は加害者への否定的反応の測定指標として機能しておらず，２種類の否定的反応を測定可能というTRIMの利点が失われている可能性がある。

そこで，TRIMの否定的反応について，特に報復の測定指標としての機能について検討を行う。否定的反応に着目したのは，否定的な価において複数の指標が存在するという

TRIMの利点と，報復がその用をなしていない可能性があるというTRIMの問題点を重視したことが理由である。

この目的の検討のために，本研究では，２段階の実証的検討を行う。最初に，特にゆるせなさが強い回答者を抽出し，報復の測定項目を中心にゆるせている回答者との比較を行う（研究１）。仮に，ゆるせなさが強い回答者においても報復が非常に低かった場合，TRIMの報復は，否定的反応の測定指標として機能していないことが示唆される。

研究1で報復が非常に低かった場合は研究２を実施し，項目の増補を行う。新たに作成する項目としては，理論モデル（Baskin & Enright, 2004; Worthington & Wade, 1999）を基に，報復よりも強度の弱い否定的反応を測定する項目を追加していくこととする。

２　研究１

2.1　目的

ゆるしプロセスにおける否定的反応である報復について再検討するため，特にゆるせなさの強い回答者を抽出し，TRIMの各項目の得点について検討を行う。

2.2　方法

研究１は，沼田（2019b）において発表された調査データの再分析である。

2.2.1　調査対象

大学生388名（男性140名，女性248名，平均年齢20.10歳，SD = 1.85）を対象とした。

2.2.2　調査時期と手続き

2017年11月から12月にかけて集団配布・回収による自記入式の質問紙調査が実施された。

2.2.3　調査内容

状態ゆるしの測定には，J-TRIM（Ohtsubo, Yamaura, & Yagi, 2015）を用いた。「報復」５項目，「回避」７項目，「慈愛」６項目の３因子から構成される。５件法（「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」）で回答を求めた。

2.2.4　分析ソフトウェア

分析には，R-3.6.2を用いた。

2.3　結果と考察

全回答者を対象としたTRIMの尺度得点平均値を算出したところ，先行研究と同様に，報復の平均値が2.26と低かった。回避は3.10，慈愛は2.69と中程度であった。

より強い報復意図を持つ回答者を選別するため，クラスタ分析を実施した。クラスタリングの基準として，k-means法を用いることとした。ただし，k-means法は分類の前にクラスタ数を指定する必要がある。そのため，クラスタ分析に先駆けて，最適なクラスタ数について探索するため，CH指標（Calinski-Harabaszindex index; Calinski, & Harabasz,

1974）とASW（average silhouette width; Hennig, 2007）を算出した。TRIMの３変数を投入し，試験的にクラスタ数を2から10を指定し，反復回数20回，シミュレーション回数20回で最適なクラスタ数を算出した。シミュレーションの結果，CH指標は２クラスタを，ASWは３クラスタを推奨した。

また，事後的な評価として，bootstrapによる安定度指標の平均推定値を算出した。これは，特定のクラスタにおいて，すべてのサンプルが同じクラスタに所属するか，シミュレーションによって検討するものである。安定度の高いクラスタほど，多数回のシミュレーションを行っても特定のクラスタが同じサンプルによって構成されやすくなる。Jaccardの類似性指標を安定度指標として，100試行を実施し，クラスタごとの平均推定値を算出している。Jaccardの類似性指標が.75を越えれば安定度は良好であり，.50を下回るとクラスターは崩壊しているとみなされる（Henning, 2007）。すなわち，100回の試行で，平均80％のサンプルが同一クラスタに所属することが望ましい。

クラスタ数を２および３に指定して推定値を算出した結果，クラスタ数を２に指定した際の類似性指標は.80と.88であり，３に指定した際の類似性指標は.80と.75と.81であった。どちらのシミュレーションでも十分な安定度が示されたため，ゆるせなさの強い小集団を抽出できる可能性が高くなるよう，より多いクラスタ数である３クラスタ解釈を採用することとした（Figure1）。

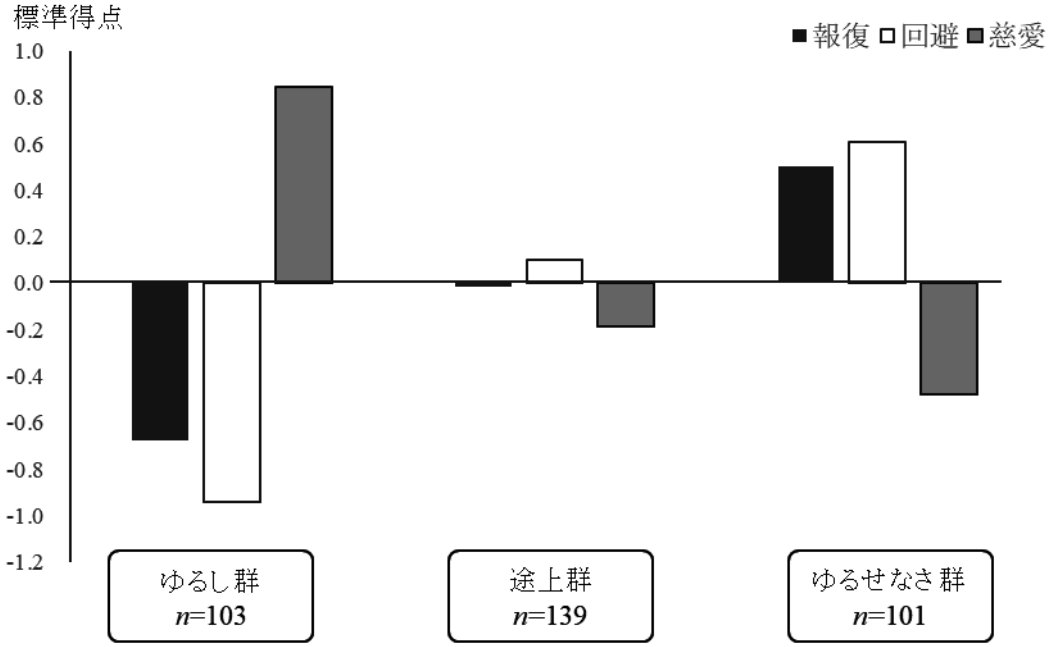

Figure1
傷ついた際の感情に基づくクラスター分析結果（研究1）

第１クラスタは，TRIMにおける報復と回避が低く，慈愛が高かったことから，「ゆるし群」と解釈した。第2クラスタは，TRIMにおける報復と回避が中程度であり，やや慈

愛が低かったことから，「ゆるし途上群」と解釈した。第３クラスタは，TRIMにおける報復と回避が高く，慈愛が３群で最も低かったことから，「ゆるせなさ群」と解釈した。

これら３群に分類された回答者の群別項目平均値を算出した（Table2に併記）。まず報復から見ていくと，全回答者の項目平均値が2.00を下回った項目が２項目見られた（8：相手に償わせるつもりだ，11：仕返しをするつもりだ）。これらは加害者に対する直接的な報復意図を測定する項目である。特に項目11は，もっとも相手への報復意図が高いと想定されるゆるせなさ群においてすら，項目平均値が2.03であった。一方で，全回答者の項目平均値が相対的に高かったのは，項目9（相手に何か悪いことが起きればよいと思う），項目10（相手がしたことの報いを受けて欲しい）であり，ゆるせなさ群において項目平均値が3.00を上回った。これらの項目は，報復意図の中でも婉曲的な表現であり，自らの手で加害者に報復をする意図というより，どこかで罰が下ってほしいと願う願望を測定していると考えられる。

回避に関する項目を見ると，全回答者の項目平均値が2.62-3.47であり，概して報復より高かった。平均値が3.00を下回ったのは項目２（相手がまるで存在せず、周りにいないかのように過ごしている）と項目６（私は、相手との関係を絶った）であった。これらは，関係の拒絶とも言える，より強い回避意図を示す項目であると解釈できる。それに対して，消極的な回避行動（項目１：できるだけ距離を置くようにしているM=3.47）や認知的色彩のある回避現象（項目３:相手を信用していない，M=3.36）は，相対的に得点が高かった。

クラスタ別にみると，ゆるせなさ群においておよそ3.50付近の得点を示しており，２項目において4.00を越えた（項目１：相手とできるだけ距離をおくようにしている，項目５：相手を避けている）。これら２項目は途上群でもゆるし群でも相対的に高い値を示した。一方で，より強い回避意図を示すと解釈できる項目２と項目６は，途上群において3.00以下，ゆるし群において2.00以下と，どの群においても相対的に低い値を示した。

慈愛に関する項目を見ると，１項目を除き，全回答者の項目平均値は２点台後半で推移していた。項目13（相手の行動は私を傷つけたが、相手に対して好意を持っている）は2.23と突出して低く，項目15（相手がしたことに関わらず、もう一度よい関係になりたい）が2.63，項目18（怒りを手放したので、相手と健全な関係を取り戻すことができる）が2.65とやや低かった。これらは，好意や向社会的行動の実行可能性を測定する項目である。したがって，ゆるしの概念的定義である肯定的感情や接近反応を明示的に測定する項目は，相対的に反応されにくいことが示唆された。項目平均値が高かったのは項目14（気持ちを鎮めて、相手と前向きに関わっていきたい）と項目17（私は、傷つきや憤りを水に流した）であり，肯定的感情や接近反応というよりは，感情が制御可能であることを示す項目であった。

群別にみると，ゆるし群では項目平均値が総じて高く，突出して低い項目13を除き，3.00を越える項目平均値を示した。項目13が突出して低い傾向は他の２群でも共通し，項目13以外は途上群において2.50前後，ゆるせなさ群で2.00よりやや高いあたりで得点が推

移していた。

以上を見ると，ゆるしの初期段階（ゆるしせなさ）の概念定義に該当する報復行動や，ゆるしの概念定義に該当する好意および接近反応は見られにくいことが示された。したがって，ゆるせなさの低減についてもゆるしの発生についても，より内的な心理現象や婉曲的な行動を検討することで，正確な現象把握が可能になると考えられる。

特に，報復の測定項目は，全回答者の項目平均値が2.00を下回る項目が複数見られるなど，報復意図の測定として十分に機能していないことが示唆された。ただし，本研究で示したデータは，ゆるせなさの弱い回答者を収集している可能性もある。TRIMの測定では，「誰かによって傷つけられた体験」とのみ教示し，報復したいほど深刻に傷つけられた体験のみについて回答が得られたとは限らない。深刻な加害においてゆるしは抑制されやすいため（Zechmeister, Garcia, Romero, & Vas, 2004），深刻に傷つけられた体験のみを対象に測定を行った場合は，報復意図が十分高く生じる可能性がある。

そこで，研究２では，より深刻に傷つけられた体験に関する回答に限定し，TRIMの項目分析を再度行う。また，より婉曲的な反応を測定するため，項目の追加も行い，ゆるしプロセスにおける否定的反応について，更に詳細に検討していく。

３　研究2

3.1　目的

研究１では，クラスタ分析を実施し，ゆるせなさが強い回答者を選別したうえで，TRIM各項目の項目平均値を検討した。項目分析の結果，報復の測定項目はゆるせなさが高い回答者であっても低い得点を示し，ゆるせなさの測定として機能していない危険性が示唆された。また，加害者への報復が結果的に叶うことを望むような，婉曲的な否定的反応が生じやすいことも示された。

こうした結果を受け，研究２では，より深刻に傷つけられた回答を対象にTRIMの項目得点について再検討するとともに，婉曲的な否定的反応について測定可能な項目を新たに作成することを目的とする。

項目の増補にあたり，研究２では消極的反応（passive reaction）に注目する。消極的反応とは，認知的あるいは内的な観点では能動的であるものの，対人的にははっきりと生じない反応とされる（Worthington & Wade, 1999）。消極的反応として，stonewalling（押し黙り）, cold emotion（冷たい感情）, emotional dissonance（感情の不協和）などがある。押し黙りは，他者との距離をとる抑圧的反応である（Worthington, 1998）。冷たい感情は悔恨，苦々しさ，回避意図を含み，ゆるしが進行しても残りやすい感情のしこりのようなものとして記述されている。感情の不協和は，加害者へのゆるしを意図した際に生じる，ゆるそうという気持ちとゆるせない気持ちとの不一致であると述べられている。

3.2　方法

3.2.1　調査手続き

㈱マクロミルに依頼し，同社保有サンプルを対象としたwebサンプリング形式による質問紙調査を行った。調査は，本研究が意図した回答者を募集するスクリーニング調査と，本調査との２回に分けて実施された。２つの調査のどちらも2021年３月上旬に実施された。

3.2.2　スクリーニング調査

調査対象者の選定に際して，誰かによって傷つけられた出来事の想起を求めて，当時の傷つきを「0. 全く傷つかなかった」から「10. 大変傷ついた」の11段階で測定した。１から９に選択肢文はつけなかった。７点以上の者のみを本調査に募集した。７点以上の回答を募集の基準としたのは，本調査と同じく０点から10点で当時の傷つきの程度を測定した沼田・小浜（2021）において，裏切り（M=8.19）やいじめ（M=7.49）といった深刻な被害を受けた者が7.00以上の傷つきを示したためである。

また，調査時点での傷つきも，当時の傷つきと同様の11段階で測定し，０点／１- ５点／６-10点で均等割り付けを行った。

3.2.3　調査対象

スクリーニング調査を経て，18歳から29歳の男女352名（男性73名，女性279名，平均年齢24.90歳，SD =3.04）を対象とした。

3.2.4　調査内容

研究１と同様に，J-TRIM 18項目を測定した。それに加え，消極的反応を測定する項目を追加した。ゆるせなさが減少したときに生じる消極的反応として，押し黙り，冷たい感情，感情の不協和を想定した８項目を追加した（Table 3）。

外的基準として，スクリーニング調査で測定した現在の傷つきに加え，抑うつ（自己評価式抑うつ尺度; Zung, 1965）および恥・罪悪感尺度（薊, 2010）を測定した。SDSは肯定的な測定項目と否定的な測定項目の２側面で構成される。恥・罪悪感尺度は状態的な羞恥感，罪悪感，屈辱感の３側面について測定される。感情強度研究（Larsen & Diener, 1987; Rubin, Hoyle, et al., 2012; Williams, 1989）およびBaskin & Enright（2004）におけるゆるしの理論モデルから，報復や怒りだけでなく恥や罪悪感といった自分に向けた強度の弱い感情も生じていると推測されたため，恥・罪悪感尺度を外的基準として設定した。

Table3
新規項目を含めた因子分析結果

		F1	F2	F3	F4	F5	共通性	複雑性
回避	相手とは関わらない	**.82**	.04	-.06	-.09	-.01	.76	1.04
回避	私は、相手との関係を絶った	**.75**	-.12	.01	-.21	.07	.64	1.23
回避	相手とできるだけ距離をおくようにしている	**.75**	.20	-.16	-.01	.16	.72	1.34
回避	相手がまるで存在せず、周りにいないかのように過ごしている	**.68**	-.07	.19	.00	.01	.53	1.17
回避	相手を避けている	**.61**	.20	-.02	-.01	.23	.65	1.51
回避	相手を信用していない	**.53**	.38	-.05	.00	-.01	.61	1.85
回避	相手に優しくするのは難しいことに気づいた	**.44**	.29	.08	-.05	.06	.54	1.89
新規	相手にはまだ感情のしこりがある	.06	**.80**	-.11	.06	.08	.60	1.08
新規	当時のことを思うと、どうしても気持ちがおさまらない	-.05	**.75**	.12	.06	.05	.65	1.08
新規	相手のしたことに関して、まだ納得できていない	.23	**.72**	-.12	.07	.01	.60	1.28
新規	相手に対する恨みつらみが残っている	.13	**.62**	.17	-.01	.01	.69	1.24
新規	相手のことを考えるとイライラする	.12	**.58**	.19	-.05	.05	.67	1.33
報復	相手に償わせるつもりだ	-.13	-.18	**.85**	-.12	.16	.56	1.26
報復	仕返しをするつもりだ	-.10	-.11	**.83**	-.03	.06	.57	1.08
報復	相手が傷つき、みじめな姿がみたい	.19	.14	**.68**	.03	-.17	.70	1.38
報復	相手に何か悪いことが起きればよいと思う	.27	.22	**.60**	.06	-.30	.74	2.26
報復	相手がしたことの報いを受けて欲しい	.28	.20	**.57**	.04	-.17	.70	1.95
慈愛	怒りを手放したので、相手と健全な関係を取り戻すことができる	.17	-.09	-.03	**.87**	-.18	.58	1.19
慈愛	相手は私を傷つけたが、それはさておき、関係を回復できる	-.13	-.01	-.02	**.78**	-.06	.69	1.07
慈愛	相手がしたことに関わらず、もう一度よい関係になりたい	-.33	.23	-.07	**.71**	.04	.72	1.69
慈愛	気持ちを鎮めて、相手と前向きに関わっていきたい	-.20	.04	-.02	**.64**	.05	.58	1.22
慈愛	相手の行動は私を傷つけたが、相手に対して好意を持っている	-.31	.04	.04	**.53**	.05	.52	1.67
慈愛	私は、傷つきや憤りを水に流した	.32	**-.41**	-.01	.32	.11	.25	3.02
新規	相手とどう接したらいいかわからない	.19	.02	-.03	-.15	**.71**	.53	1.24
新規	相手に対してどのような気持ちを抱いているか、よくわからない	.11	.06	.02	.05	**.54**	.38	1.12
新規	相手を許すべきかどうか、迷っている	-.10	.06	.24	.21	**.40**	.38	2.61
	負荷量平方和	4.54	3.91	3.32	3.01	1.28		
	寄与率	.28	.24	.21	.19	.08		
	因子間相関	F1	.56	.37	-.45	.13		
		F2		.65	-.30	.22		
		F3			.05	.29		
		F4				.43		

3.3　結果と考察

3.3.1　尺度構成

因子分析の結果，SDSは肯定と否定の２因子に分かれた。恥・罪悪感尺度は先行研究の想定と合致する３因子に分かれた。そのため，先行研究にならって得点化を行った。現在の傷つきは素点をそのまま得点として扱うこととした。

消極的反応として新規作成した８項目とJ-TRIMにおける18項目の計26項目の尺度構成を行うため，探索的因子分析を実施した（Table3）。因子数の探索のため，平行分析およびMAP基準によって因子数を探索したところ，対角SMCを用いた平行分析では５因子が，MAP基準では４因子が推奨された。スクリー基準でも５因子解釈が示唆されたため，暫定的に５因子指定で重み付き最小二乗法・プロマックス回転の因子分析を行うこととした。

分析の結果，ほぼ単純構造が得られ，既存の３因子も概ね再現された。そのため，5因子構造を採用し，各因子の解釈を行うこととした。

J-TRIMの既存項目をまずみていくと，第１因子に回避因子が，第3因子に報復因子が，第４因子に慈愛因子が，それぞれまとまった。慈愛因子に含まれる項目のうち，１項目（私は、傷つきや憤りを水に流した）のみ，慈愛因子に十分な負荷量を示さなかった。ただし，先行研究との整合性を重視し，これまでと同じ項目を用いて尺度得点を算出することとした。

新規項目のまとまりをみていくと，第２因子は，「相手にはまだ感情のしこりがある」「当時のことを思うと、どうしても気持ちがおさまらない」といった，冷たい感情を表す感情がまとまった。わかりやすさを重視し「感情のしこり」因子と命名した。第４因子は，「相手とどう接したらいいかわからない」「相手を許すべきかどうか、迷っている」といった，感情の不協和を表す感情がまとまったため，「不協和」因子と命名した。

計５因子に該当する項目について，それぞれ算術得点を算出し，尺度得点とした。５変数の相互相関および，関連変数との相関をTable4に示す。

相関分析の結果，感情のしこりは，報復および回避と正の相関が，慈愛とは負の相関がみられた。また，当時および現在の傷つきや羞恥心，屈辱感，抑うつ症状とも正の相関がみられた。不協和は，回避と正の相関がみられ，現在の傷つきや恥･罪悪感尺度の３側面，抑うつ症状とも正の相関がみられた。また慈愛とも正の相関がみられた。

Table4
各変数の相関係数

		報復	回避	慈愛	しこり	不協和
関連変数	当時の傷つき	.17 **	.23 **	-.15 **	.28 **	-.03
	現在の傷つき	.34 **	.22 **	-.09	.55 **	.16 **
	罪悪感	.10	.02	.25 **	.08	.36 **
	羞恥心	.32 **	.31 **	-.09	.45 **	.21 **
	屈辱感	.16 **	.09	.04	.18 **	.25 **
	肯定	-.07	-.05	.17 **	-.18 **	-.05
	否定	.34 **	.24 **	-.02	.39 **	.31 **
相互相関	報復		.54 **	-.19 **	.69 **	.29 **
	回避	.16 **		-.52 **	.69 **	.30 **
	慈愛	.12 *	-.49 ***		-.34 **	.19 **
	しこり	.52 ***	.37 ***	-.13 *		.36 **
	不協和	-.01	.27 ***	.43 ***	.21 ***	

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

note) 相互相関については，対角要素の右上に単相関を，左下に，対象の2変数以外すべてを統制した偏相関を記載した

3.3.2　回答者の分類

研究１と同じく，よりゆるせなさの強い回答者を選別するため，クラスタ分析を実施した。投入変数は，J-TRIMの３変数と新規項目で構成された２変数の計５変数を用いることとした。研究１と同様に望ましいクラスタ数を探索し，k-means法によって回答者の分類を行った（Figure2）。

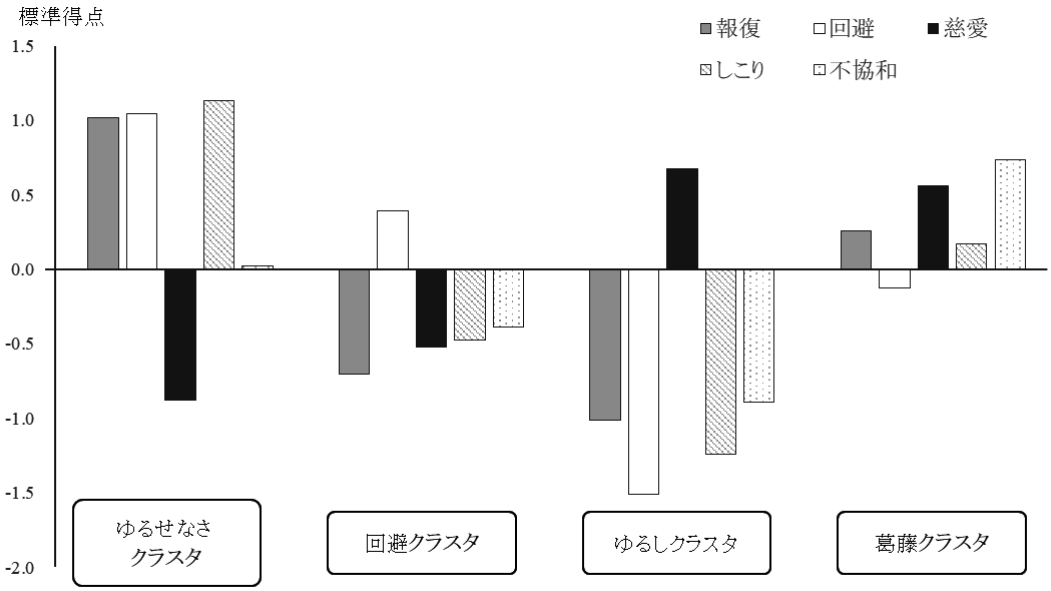

Figure2
傷ついた際の感情に基づくクラスター分析結果（研究2）

第１クラスタは，慈愛が最も低く，否定的反応が不協和を除いて高かったため「ゆるせなさクラスタ」と命名した[2]。第２クラスタは，回避のみが平均値より高く，他の得点はすべて平均値より低かったため，「回避クラスタ」と命名した。第３クラスタは，慈愛のみが平均値より高く，他の得点はすべて平均値より低かったため，「ゆるしクラスタ」と命名した。第４クラスタは，慈愛と報復の双方が平均値より高く，不協和が４クラスタで最も高かったため，「葛藤クラスタ」と命名した。

これら４クラスタの特徴を把握するため，クラスタごとに外的基準の平均値を算出した（Table5）。分析の結果，すべての従属変数において有意差が見られたため，Holm法による多重比較を行った。

Table5
適応指標における4クラスタ比較

従属変数	ゆるせなさクラスタ			回避クラスタ			ゆるしクラスタ			葛藤クラスタ			統計量 (df=3, 320)	
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	n	平均値	SD	n	平均値	SD	F値	η^2
当時の傷つき	82	9.30 [a]	1.05	66	8.58 [b]	1.23	65	8.43 [b]	1.32	111	8.55 [b]	1.21	8.81 ***	.076
現在の傷つき	82	5.68 [a]	3.24	66	1.68 [c]	2.39	65	2.45 [c]	3.13	111	3.44 [b]	3.07	25.18 ***	.191
罪悪感	82	1.77 [b]	0.72	66	1.59 [b]	0.63	65	1.74 [b]	0.76	111	2.15 [a]	0.69	10.89 ***	.093
羞恥心	82	3.05 [a]	0.74	66	2.61 [b]	0.76	65	2.25 [c]	0.82	111	2.72 [b]	0.63	15.20 ***	.125
屈辱感	82	2.17	0.98	66	1.91	0.92	65	1.90 [b]	0.87	111	2.22 [a]	0.83	2.90 *	.027
SDS(肯定)	82	1.97 [b]	0.74	66	2.23	0.77	65	2.35 [a]	0.79	111	2.13	0.70	3.33 *	.030
SDS(否定)	82	2.20 [a]	0.75	66	1.74 [b]	0.57	65	1.62 [b]	0.51	111	2.00 [a]	0.63	12.89 ***	.108

*** p <.001, ** p <.01, * p <.05

note) 多重比較（holm法）の結果，有意な平均差が見られた群に対して，高い順にa, b ,cと記号を付した

ゆるせなさクラスタは当時の傷つきも（F=8.81, p<.001。以下すべての記述でdf=3, 320），現在の傷つきも（F=25.18, p<.001），他の３クラスタより高かった。現在の傷つきは，葛藤クラスタが回避クラスタおよびゆるしクラスタより高かった。罪悪感は葛藤クラスタが他の３クラスタより高かった（F=10.89, p<.001）。羞恥心はゆるせなさクラスタが最も高く，次いで葛藤クラスタおよび回避クラスタが高く，ゆるしクラスタは最も低かった（F=15.20, p<.001）。屈辱感は，葛藤クラスタがゆるしクラスタより高かった（F=2.90, p<.05）。抑うつのなさを表すSDS（肯定）では，ゆるしクラスタがゆるせなさクラスタより高かった（F=3.33, p<.05）。抑うつ症状を示すSDS（否定）では，ゆるせなさクラスタおよび葛藤クラスタが，回避クラスタおよびゆるしクラスタよりも高かった（F=12.89, p<.001）。

以上の結果を解釈すると，ゆるせなさクラスタは，否定的反応が強く，精神的にも不健康であることから，ゆるしが生じていない典型的な回答者であると考えられる。逆に，ゆるしクラスタは，ゆるしが発生している典型的な回答者と考えられる。

一方で，本研究では中間的な，あるいは曖昧な特徴を有する２つの小集団が得られた。回避クラスタは，回避のみが高かった。報復も感情のしこりも不協和も低い一方で，慈愛も低かった。慈愛が低く，回避的な対人動機を持っているため，十分にゆるしが進行していない者たちで構成される小集団であると予想される。ただし，抑うつはゆるしクラスタと同様に低く，現在の傷つきはゆるしクラスタに次いで低かった。

葛藤クラスタは，報復意図がゆるせなさクラスタに次いで高く，現在の傷つきや抑うつも高かった。また，屈辱感と罪悪感は４クラスタの中で最も高かった。したがって，否定的反応が強く発生しており，ゆるしプロセスの中でも初期段階に該当すると解釈可能である。しかし，慈愛も同時に高く，否定的反応と肯定的反応が同時に発生していた。この特徴は，ゆるしの典型的なプロセスとは異なるものであり，理論モデル（Worthington & Wade, 1999）で指摘された不協和が生じている状態であることを示唆している。

3.3.3　項目分析

これらの４クラスタの特徴を踏まえ，改めてTRIM各項目について考察を行っていく。クラスタ別の項目平均値をTable6に示す。

まず報復から見ていくと，研究１と同様に，項目8（相手に償わせるつもりだ）と項目11（仕返しをするつもりだ）は全回答者の項目平均値が2.00程度と非常に低かった。ただし，ゆるせなさが高いと解釈されるゆるせなさクラスタおよび葛藤クラスタにおいては2.50程度と，研究１より高い値を示した。こうした値の変化は，研究２においてより深刻に傷つけられた経験を収集した，すなわち当時の傷つきが7以上の者のみの回答を収集したためであると考えられる。研究２において報復の項目平均値が高まる傾向は他の項目にも見られ，研究１ではゆるせなさ群においても項目平均値が最高3.35であったのに対し，研究２ではゆるせなさクラスタの項目平均値が4.00を越える項目が３項目見られた。

Table6
クラスタ別の項目平均値

	因子	項目文	全回答	ゆるせなさクラスタ	葛藤クラスタ	回避クラスタ	ゆるしクラスタ
1	回避	相手とできるだけ距離をおくようにしている	3.58	4.73	3.55	4.05	1.61
2	回避	相手がまるで存在せず、周りにいないかのように過ごしている	3.10	4.06	3.16	3.29	1.58
3	回避	相手を信用していない	3.68	4.88	3.64	3.92	1.94
4	回避	相手に優しくするのは難しいことに気づいた	3.10	4.39	3.17	2.85	1.69
5	回避	相手を避けている	3.25	4.58	3.38	3.19	1.44
6	回避	私は、相手との関係を絶った	3.41	4.55	3.12	4.05	1.69
7	回避	相手とは関わらない	3.64	4.87	3.42	4.32	1.65
8	報復	相手に償わせるつもりだ	2.03	2.51	2.54	1.41	1.39
9	報復	相手に何か悪いことが起きればよいと思う	2.86	4.44	3.16	2.16	1.27
10	報復	相手がしたことの報いを受けて欲しい	2.82	4.35	3.12	2.06	1.37
11	報復	仕返しをするつもりだ	1.85	2.29	2.36	1.24	1.24
12	報復	相手が傷つき、みじめな姿がみたい	2.61	4.06	2.94	1.81	1.24
13	慈愛	相手の行動は私を傷つけたが、相手に対して好意を持っている	2.11	1.19	2.73	1.65	2.79
14	慈愛	気持ちを鎮めて、相手と前向きに関わっていきたい	2.44	1.39	3.10	1.92	3.29
15	慈愛	相手がしたことに関わらず、もう一度よい関係になりたい	2.20	1.21	2.91	1.65	2.95
16	慈愛	相手は私を傷つけたが、それはさておき、関係を回復できる	2.29	1.22	2.82	1.91	3.19
17	慈愛	私は、傷つきや憤りを水に流した	2.77	2.19	3.07	2.73	3.05
18	慈愛	怒りを手放したので、相手と健全な関係を取り戻すことができる	2.42	1.53	2.93	2.20	2.90
19	しこり	当時のことを思うと、どうしても気持ちがおさまらない	2.93	4.16	3.38	2.10	1.71
20	しこり	相手のことを考えるとイライラする	2.94	4.39	3.25	2.32	1.42
21	しこり	相手のしたことに関して、まだ納得できていない	3.38	4.60	3.63	3.16	1.69
22	しこり	相手にはまだ感情のしこりがある	3.16	4.35	3.36	2.84	1.74
23	しこり	相手に対する恨みつらみが残っている	3.04	4.52	3.39	2.33	1.52
24	しこり	相手への怒りがおさまってしまうのが嫌だ	2.23	2.71	2.84	1.57	1.42
25	不協和	相手に対してどのような気持ちを抱いているか、よくわからない	2.63	2.56	3.38	2.34	1.79
26	不協和	相手を許すべきかどうか、迷っている	2.12	1.74	3.08	1.72	1.44
27	不協和	相手とどう接したらいいかわからない	2.78	3.06	3.42	2.54	1.65

note）項目平均値のクラスタ別推移を把握しやすいよう，ゆるせなさが高いと想定される順にクラスタを並べた

回避に関する項目を見ると，全回答者の項目平均値が3.10-3.68と研究１よりも総じて高い値を示した。したがって，報復と同様に，深刻に傷つけられた者ほど否定的反応が生じやすいことが示された。特に，ゆるせなさクラスタにおいては，すべての項目において項目平均値が4.00を越えた。

慈愛に関する項目を見ると，研究１で突出して低かった項目13（相手の行動は私を傷つけたが、相手に対して好意を持っている）は，研究２においても2.11と低かった。なお，研究１と異なり，慈愛の項目平均値は総じて低い傾向が見られた。これは，研究２で深刻に傷つけられた経験を募集したためであると考えられる。ただし，ゆるしクラスタおよび葛藤クラスタでは項目平均値が3.00を越える項目が複数見られたことから，床効果と判断すべきほどには測定に問題がなかった。

新規追加項目は，先行研究の知見とも研究１の得点とも比較ができないため，ごく簡単に考察するに留める。感情のしこりは，総じてゆるせなさクラスタにおいて高く，報復や回避と同様に，ゆるしプロセスの初期段階で生じやすい否定的反応であると考えられる。それに対して，不協和は葛藤クラスタが最も高く，他のクラスタにおいては総じて低かった。特に項目26（相手を許すべきかどうか、迷っている）は，葛藤クラスタにいて3.08であるのに対して，ゆるせなさクラスタ1.74，回避クラスタ1.72，ゆるしクラスタ1.44と，葛藤クラスタにおいてのみ特異的に高かった。

４　総合考察

本研究では，否定的反応に重点を置き，TRIM項目の機能について再検討を行うこと，また相対的に強度の弱い否定的反応について検討することを目的とした。

研究１では，先行研究（Barcaccia,Ioverno,Salvati, Medvedev,Pallini, & Vecchio, 2021; Bono, et al., 2008; McCullough, et al., 2003; 髙田・小杉. 2016）と同様に，本研究においても報復意図は生じにくいことが示された。特に否定的反応が生じやすい回答者を選別するため，クラスタ分析を行ったところ，回答者は３群に分類された。ゆるし群，途上群，ゆるせなさ群の３群それぞれについてTRIM各項目の平均値を算出したところ，特に報復意図が強いと考えられるゆるせなさ群において，結果的に報復が叶うことを望む項目（相手に何か悪いことが起きればよいと思う，相手がしたことの報いを受けて欲しい）は3.00点を上回ったものの，直接的な報復意図（相手に償わせるつもりだ，仕返しをするつもりだ）は2.00程度と低いままであった。

直接的な報復意図という強い否定的反応がほぼ生じていなかったことから，より深刻に傷つけられた体験に対する検討の必要性や，否定的反応の中でも相対的に強度の弱い現象について測定する必要性が指摘された。そこで，研究２では，傷つけられた程度の強い回答者のみを検討対象としてTRIMの測定を行うとともに，加害者に対する消極的反応について新たに測定した。因子分析の結果，感情のしこりと，ゆるす気持ちとゆるさない気持

ちとの不協和が新たなまとまりとして導出された。

相関分析の結果，感情のしこりは否定的反応として概ね先行研究の知見と整合する結果であった。すなわち，報復や回避と正の相関が，慈愛とは負の相関がみられた。また，強く傷つき，屈辱感を抱くほど感情のしこりは生じやすく，精神的健康に悪影響を与えていた。不協和は，回避と正の相関がみられ，現在の傷つきや屈辱感，抑うつとも正の相関がみられた。これらは否定的反応として先行研究の知見（Worthington, et al., 2007）と矛盾しないものである。しかし，不協和は慈愛とも正の相関がみられた。

研究２でもクラスタ分析を実施したところ，研究１と同様にゆるしクラスタおよびゆるせなさクラスタが得られた。これらは，ゆるしが1）否定的反応の発生，2）それらの低減，3）肯定的反応の増加という3段階から構成されるプロセスであるという仮定（Wilkowski, et al., 2010; Wohl & McGrath, 2007）と合致するものであった。

こうした典型的な小集団だけでなく，研究２では回避クラスタと葛藤クラスタが得られた。葛藤クラスタは，報復がゆるせなさクラスタに次いで高いことから，ゆるしの進行プロセスの第１段階と解釈される一方で，慈愛がゆるしクラスタと同程度に高いという，これまでのゆるしプロセスの仮定と矛盾した特徴を有していた。こうした結果が得られた理由として，屈辱感の作用が挙げられる。屈辱感が高いほどゆるしは進行しづらく，報復が高まりやすい（沼田, 2019b）。また，葛藤クラスタはゆるしクラスタと同程度の慈愛を示すと同時に，ゆるしクラスタよりも屈辱感が強い。したがって，屈辱感による否定的反応の発生と，ゆるしプロセスの進行による肯定的反応の発生が拮抗し，感情の不協和が生じていると考えられる。換言すれば，相手からの加害による屈辱感が低減していなければ，肯定的反応を無理に増加させようとしても，葛藤を引き起こすだけでゆるしは十分に進行しないと予想される。

４クラスタごとに，TRIMおよび新規作成項目の項目平均値を算出した結果，ゆるせなさクラスタにおいて，高く評定されやすい婉曲的な報復意図は4.00を越え，低く評定されやすい直接的な報復意図においても2.50前後を示した。したがって，報復は深刻に傷つけられた回答者の，かつゆるしプロセスの第１段階において発生する現象であると推察される。ゆるしが内的変容プロセスであることは多くの研究で指摘されてきたが（沼田, 2019a; Wilkowski, et al., 2010; Wohl & McGrath, 2007），傷つきが強かった場合とそうでない場合といったように，プロセスをいくつかのタイプに分けて検討する必要があると考えられる。

以上のように，本研究では否定的反応に重点を置きながら，TRIM測定項目の機能について再検証を行った。その結果，行動そのものや直接的な意図は反応として生じづらく，内的な現象や婉曲的な現象のほうが反応されやすいことが明らかとなった。特に傷つけられた程度が低い体験を含むデータでは，報復が床効果を起こし，ゆるしプロセスにおける否定的反応の指標として機能しないことが示唆された。

また，婉曲的な反応を増補した研究２では，不協和や葛藤クラスタのような，これまで

の実証的検討では仮定されていない現象を示唆する結果が得られた。これは，実証的検討に理論モデルの知見を援用することで，ゆるしに関する新たな現象を発見できる可能性を示唆している。本研究ではWorthington & Wade（1999）とBaskin & Enright（2004）の2つのモデルのみを援用したが，今後は実証研究として検討しうる範疇で，より多くの理論モデルを検討する必要があると考えられる。

最後に，今後の課題について２点述べる。

第一は，新規項目の妥当性の検討である。本研究で「感情のしこり」と解釈された項目は，報復や回避と中程度の正相関がみられ，関連変数との相関においても，報復や回避と類似した関連が見られた。また，項目平均値においても，回避の高さに特徴づけられる回避クラスタを除いた3クラスタにおいて，回避と類似した得点を示した。したがって，TRIMで既に測定された否定的反応と類似した特徴を有しており，新しく測定する意義が希薄である可能性がある。したがって，妥当性検証の中でも，特に弁別的妥当性を重点的に検討していく必要がある。一方で，「不協和」と解釈された項目は，これまでのゆるし研究にない特徴を示した。すなわち，不協和得点は否定的反応（回避，感情のしこり）とも肯定的反応（慈愛）とも正の相関を示し，葛藤クラスタにおいてのみ高かった。これがゆるしプロセスで見られる現象とみなすことができれば新規性の高い発見と言えるが，こうした特異的な現象をゆるしにおける内的反応と判断するにはより多くの実証的検討が必要であろう。したがって，妥当性検証においても，特に併存的妥当性を重点的に検討していく必要があると考えられる。

第二は，実際のプロセスに関する検討である。ゆるしは概念的に，プロセスとして扱われることの多い現象である。そうした検討枠組みに従い，ゆるせなさ群（クラスタ）はゆるしが進行していない小集団であり，ゆるし群（クラスタ）はゆるしが進行した小集団であると仮定して実証的検討の解釈を進めてきた。しかし，本研究の測定と分析は横断的なものであり，実際にゆるし群（クラスタ）がゆるしプロセスの終盤を迎えていると示す実証データは存在しない。したがって，縦断的な検討によってゆるしの進行プロセスについて直接検討することが必要とされる。

１　ゆるしでは「自分で自分がゆるせない」といった自己加害も想定しうるが，本論文では他者から加害を受けた状況におけるゆるしを取り扱うものとし，以下に述べる状態ゆるしの測定尺度も他者加害に関するもののみを紹介する。

２　分類された小集団の表記が研究１では「群」であり，研究2では「クラスタ」となっている。これは，２つのクラスタ分析でサンプルも投入変数も異なるためである。類似した特徴を持つものの質的に異なると想定される小集団を区別するため，こうした記述方法を用いることとした。

5　引用文献

［1］薊理津子（2010）. 屈辱感, 羞恥感, 罪悪感の喚起要因としての他者の特徴. パーソナリティ研究, 18（2）, 85-95.

［2］Barcaccia, B., Ioverno, S., Salvati, M., Medvedev, O. N., Pallini, S., & Vecchio, G. M.（2021）. Measuring predictors of psychopathology in Italian adolescents：Forgiveness, avoidance and revenge. *Current Psychology*, 1-15.（published online https：//doi.org/10.1007/s12144-021-01414-2）

［3］Baskin, T. W., & Enright, R. D.（2004）. Intervention studies on forgiveness：A meta - analysis. *Journal of counseling & Development*, *82*（1）, 79-90.

［4］Bono, G., McCullough, M. E., & Root, L. M.（2008）. Forgiveness, feeling connected to others, and well-being：Two longitudinal studies. *Personality and social psychology bulletin*, *34*（2）, 182-195.

［5］Calinski, T., and Harabasz, J.（1974）A Dendrite Method for Cluster Analysis, *Communications in Statistics*, *3*, 1-27.

［6］Dixon-Gordon, K. L., Aldao, A., & De Los Reyes, A.（2015）. Emotion regulation in context：Examining the spontaneous use of strategies across emotional intensity and type of emotion. *Personality and Individual Differences*, *86*, 271-276.

［7］Enright, R. D.（2004）. Enright Forgiveness Inventory. Menlo Park, CA：Mind Garden.

［8］Gerlsma, C., Lugtmeyer, V., Van Denderen, M., De Keijser, J.（2020）Revenge and forgiveness after victimization：psychometric evaluation of a Dutch version of the TRIM intended for victims and offenders. *Current Psychology*.（published online https：//doi.org/10.1007/s12144-020-01283-1）

［9］Hennig, C.（2007）Cluster-wise assessment of cluster stability. *Computational Statistics and Data Analysis,* 52, 258-271.

［10］Larsen R. J., Diener E.（1987）. Affect intensity as an individual difference characteristic：A review. *Journal of Research in Personality*, *21*, 1-39.

［11］McCullough, M. E., Fincham, F. D., & Tsang, J. A.（2003）. Forgiveness, forbearance, and time：the temporal unfolding of transgression-related interpersonal motivations. *Journal of personality and social psychology*, *84*（3）, 540-557.

［12］McCullough, M. E., Root, L. M., & Cohen, A. D.（2006）. Writing about the personal benefits of a transgression facilitates forgiveness. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *74*, 887-897.

［13］沼田真美（2019a）. 自己注目が他者へのゆるしおよび自己へのゆるしへ及ぼす影響 ―自尊感情の2側面を媒介として― 感情心理学研究, 27, 10-19.

［14］沼田真美（2019b）. 誇大型-過敏型自己愛が累積屈辱感を媒介してゆるしに及ぼす影

響. 心理学研究, 90（4）, 360-367.
［15］沼田真美・小浜 駿（2021）. ゆるしにおける傷つきの変容過程に関する検討―時系列変化と出来事の分類の観点から― 目白大学心理学研究
［16］Ohtsubo, Y., Yamaura, K., & Yagi, A.（2015）. Development of Japanese measures of recosnciliatory endencies：The Japanese trait forgivingness scale and the Japanese proclivity to apologize measure. *Japanese Journal of Social Psychology, 31,* 135–142.
［17］Rubin, D. C., Hoyle, R. H., & Leary, M. R.（2012）. Differential predictability of four dimensions of affect intensity. *Cognition & emotion, 26*（1）, 25-41.
［18］Rye, M. S., Loiacono, D. M., Folck, C. D., Olszewski, B.T., Heim, T.A., & Madia, B. P.（2001）. Evaluation of the psychometric properties of two forgiveness scales. *Current Psychology, 2,* 260-277.
［19］髙田菜美・小杉考司（2016）. 侵害における対人動機づけ尺度の作成. 心理学叢誌, 16, 97-103.
［20］Thompson, L. Y., Snyder, C. R., Hoffman, L., Michael, S. T., Rasmussen, H. N., Billings, L. S., ... & Roberts, D. E.（2005）. Dispositional forgiveness of self, others, and situations. *Journal of personality, 73*（2）, 313-360.
［21］Wilkowski, B. M., Robinson, M. D., & Troop-Gordon, W.（2010）. How does cognitive control reduce anger and aggression? The role of conflict monitoring and forgiveness processes. *Journal of personality and social psychology, 98,* 830-840.
［22］Wohl, M. J., & McGrath, A. L.（2007）. The perception of time heals all wounds：Temporal distance affects willingness to forgive following an interpersonal transgression. *Personality and Social Psychology Bulletin, 33*（7）, 1023-1035.
［23］Worthington, E. L., Jr.（1998）. An empathy - humility - commitment model of forgiveness applied within family dyads. *Journal of Family Therapy, 20*（1）, 59-76.
［24］Worthington, E.L., Jr., & Wade, N.G.（1999）. The psychology of unforgiveness and forgiveness and implications for clinical practice. *Journal of social and Clinical psychology, 18,* 385-418.
［25］Worthington, E. L. Jr., Witvliet, C. O., Pietrini, P., & Miller, A. J.（2007）. Forgiveness, health, and well-Being：A review of evidence for emotional versus decisional Forgiveness, dispositional forgivingness, and reduced unforgiveness. *Journal of Behavioral Medicine, 30,* 291-302.
［26］ Zechmeister, J. S., Garcia, S., Romero, C., & Vas, S., N.（2004）. Don't apologize unless you mean it：A laboratory investigation of forgiveness and retaliation. *Medical Social Science, 33,* 532-564.
［27］Zung, W. W.（1965）. A self-rating depression scale. *Archives of general psychiatry, 12*（1）, 63-70.